105

前平遺跡

（鹿児島市吉野町雀宮前平）

位置と環境

鹿児島市は県のほぼ中央に位置し，鹿児島湾頭の西に面する。最高1,111mの桜島を除けば市付近の最高地点は約500m，海の最深地点は海面下150mである。地形は大部分は200mを越えない丘陵地で東北部が高く西部へ低い。川は中央部に甲突川，南部に新川・脇田川・永田川，北部に稲荷川があり，殆んど北北西から南南東へ向って流れ，谷もこの方向に開けている。従って全体の地形は，北西より南東に漸次高度を減じている。海底地形では北東部の百mより深い地域が目立つが，姶良カルデラ中の陥没地域である。

北西に高く南東に低い全体の地形に対して，直交する北東―南西の構造線があり，伊敷方面の３条の谷はそれを示し，城山の断崖もその現われである。

鹿児島市街地は洪積紀以後次第に隆起して生じた地帯に甲突川が上流より土砂を運び込み現在の海岸線を構成したものである。

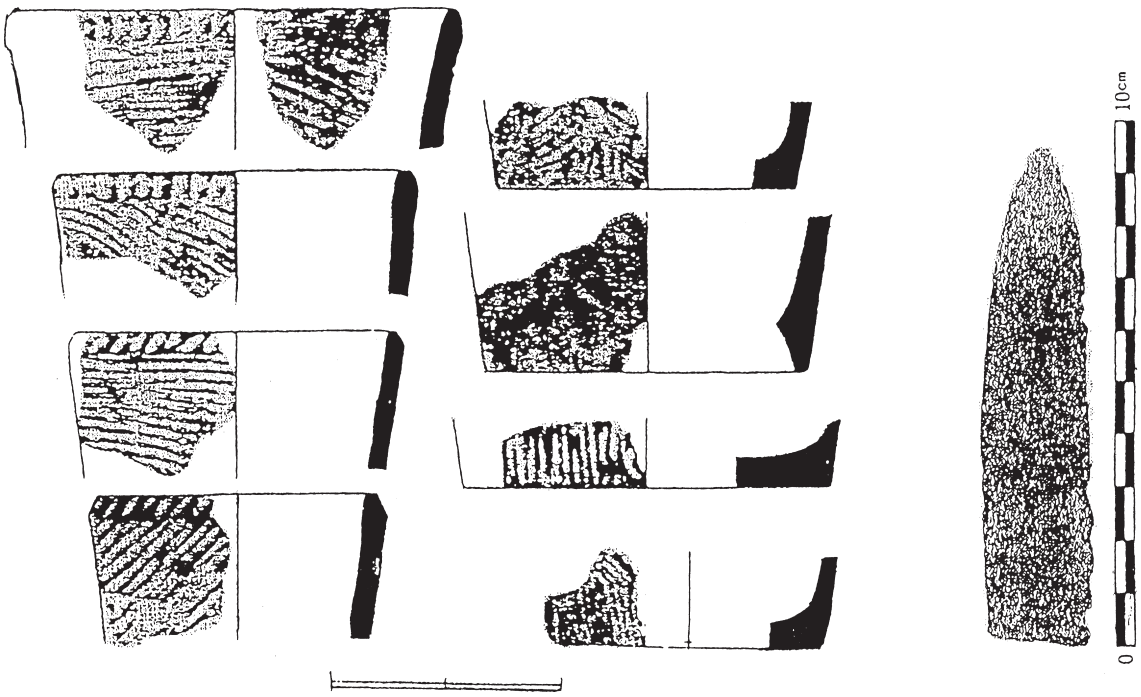
遺跡地は市街地の北東端，吉野台地の前縁部で，百mの等高線に囲まれた南北450m，東西350mの略三角形の独立丘陵で，頂部に標高143mの三角点があり，頂上の南北53m，東西66mの楕円形の平旦地が遺跡である。

第１図　前平遺跡と南州神社遺跡の位置

調査の経緯

昭和27年３月27日（日）かねて生徒の父兄村山畩市の前平にある畑が遺跡地であることを聞き知っていたので，生徒の村山俊雄・長瀬義明・永井某と共に現地の調査を行った。耕作によって赤褐色の地層（アカホヤ）に達しており，下部の包含層から遺物が掘り出されて散布したもので，それらの土器石器を採集した。

前平遺跡の南南西1.026㎞の南洲神社遺跡は同じ



第２図　前平遺跡出土の前平式土器と石槍

丘陵の続きで，標高50mの縁辺部にあり，同じ型式の土器を出土する良好な単純遺跡である。遺跡は南洲神社墓地の西縁に，南北方向に幅２m長さ12mの堤防状に，本来の包含層が人の手が加えられないまま，偶然に残存していたものである。昭和31年11月発掘調査を行った。重要な資料であるが，本書ではほかに取り上げる計画が無いので，ここに付帯して掲載することにした。

遺構と遺物

前平遺跡の採集品である。口縁部に刻み目を施し，器面には貝殻の腹縁で斜条痕を施し，更に貝殻腹縁によって刺突文または，蛇行条痕文を重ね，底部外周には従位の刻線を施文している。器形には円筒形平底平坦口縁と角筒形平底の波状口縁の二種類がある。新発見の型式であり，遺跡名によって「前平式］と名付けた。縄文時代早期の型式である。共伴の頁岩製磨製石槍は長さ9.7㎝幅2.2㎝厚さ0.5㎝,刃部に鋸歯状の刻みを施し殺傷力を強化する高度の技術を持っていた。

遺跡地は3000㎡を越える平旦地であるから集落跡の存在が考えられる。

南洲神社遺跡の発掘は，地形にしたがって幅２m長さ12mのトレンチ堀である。地層は10層を数え，上部２層は弥生前期を基本としているが埋葬による人骨の出土があり，一部撹乱もみられる。３層から４層にかけて赤褐色土層（アカホヤ）が見られ以下は黒褐色の土層に移行している。

４層から10層までは前平式がほとんど単純に出土しているが，中に若干の分類が必要な土器型式を含み，また少数であるが石坂式・吉田式が含まれており，最下層からは自縄自巻の縄文原体の末端で窩文を施した草創期の土器が出土している。

前平式の中で分類すべきとした土器は，第４図に示したもので器面に施した条痕文のみで，刺突文・蛇行条痕文の重複施文のないもので，これを独立の型式として前平Ｂ式と呼ぶことにした。

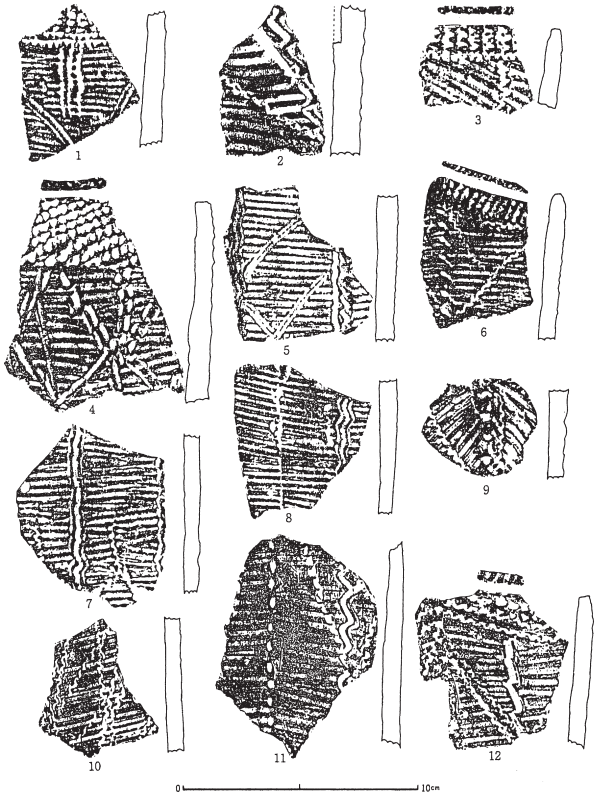
資料の所在

出土遺物は，河口貞徳宅に保管されている。

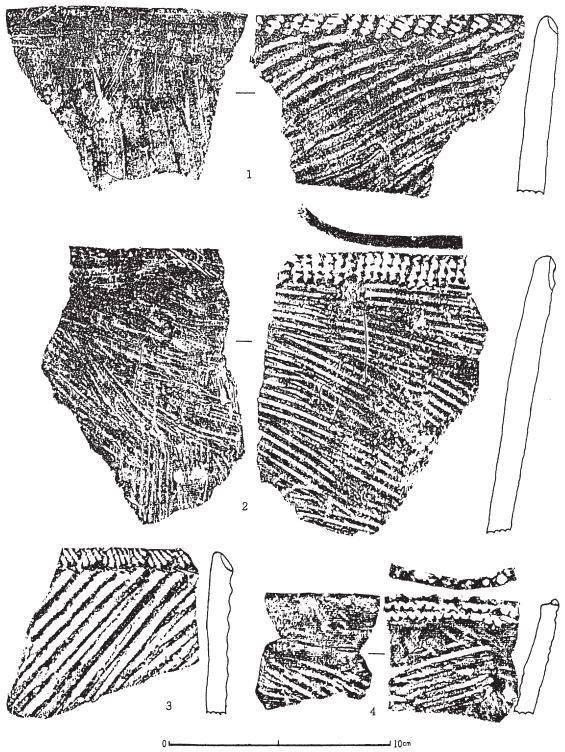
参考文献

鹿児島市発行1955『鹿児島のおい立ち』
河口貞徳1988「鹿児島」『日本の古代遺跡』保育社
河口貞徳1989「吉田式と前平式のその後について」『鹿児島考古』23

（河口貞徳）



第３図　南州神社遺跡出土，前平式土器



第４図　南州神社遺跡出土，前平Ｂ式土器